優秀賞

帰り道の大丈夫

宮崎県　宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校　二学年
大峯　果林

塾の帰り道、ウインカーの規則正しいリズムと、ラジオから流れる少し古い音楽が、私たちのＢＧＭだった。祖母が運転する車の助手席は、世界で一番素直になれる場所だった。家では話さないことも、この時間だけは不思議と口にできた。信号待ちのたびに、祖母は少しだけこちらを見て、その日の学校のことを聞いてくれた。学校での出来事や、心に引っかかった小さな悩みも、この車の中では自然と口に出せた。祖母は私の話を最後まで聞いてから、ゆっくりと言った。

「大丈夫、大丈夫。」

私はその言葉を聞くと、不思議と安心できた。祖母が言うのだから、きっとそうなのだとずっと思っていた。

その時間が、ある日突然なくなった。検査で病気が見つかり、祖母が入院したのだ。祖母は昔から病気をしたことがほとんどなく、健康には自信があると笑っていた。保険の話をしても、必要ないと軽く流していた。

そんな祖母に、父だけは、何かあってからでは遅いから「大丈夫なときに備える」ことが大切だと何度も話していた。祖母は面倒くさそうにしながらも、父の話を聞いて、保険に入ることにしたそうだ。

私は、祖母ならすぐに元気になるのだろうと思っていた。あの帰り道も、またすぐに戻ってくるはずだった。けれど、その日はなかなかやってこなかった。祖母のいない帰り道は思っていた以上に寂しく、いつもとはまったく違って感じられた。

ある夜、父と母が、入院費や入院が長引いたときのお金を心配して話しているのが耳に入った。私は胸の奥がぎゅっと締めつけられた。祖母のことだけでなく、お金のことまで心配しなければならないことが怖かった。その後、父が保険を確認すると、入院や手術の保障があることが分かった。その話を聞き、家族の張りつめていた空気が少しやわらいだ。

数日後、祖母から電話があった。

「思っていたよりお金がかかるのね。」

少し間があって、祖母は静かに言った。

「こんなときのためだったのね。」

その声は少し弱くて、でもどこか、ほっとしたようにも聞こえた。そして

電話の最後に、祖母はいつものように言った。

「大丈夫、大丈夫。」

その声は、自分に言い聞かせているように聞こえた。そのとき、帰り道の「大丈夫」も、私を安心させるための言葉だったのかもしれないと思った。私は初めて、その言葉の重さと、そこに込められた祖母の思いやりに気づいた。

祖母が私の「大丈夫」を支えてくれていたように、保険もまた、見えないところで祖母の「大丈夫」を支えていたのかもしれない。もし保険がなかったら、祖母だけでなく、私たち家族の不安ももっと大きくなっていただろう。保険は、治療を受ける祖母だけでなく、そばで心配する家族の安心も支えてくれていたのだ。

やがて祖母は退院し、帰り道が戻ってきた。ラジオから流れる少し古い音楽。信号待ちでこちらを見る祖母。祖母は、やっぱり言う。

「大丈夫、大丈夫。」

大丈夫だから、備えなくていいのではない。大丈夫でいられるように、元気なときから備えておく。父が言っていた「大丈夫なときに備える」という言葉の意味が、今なら分かる。

保険は、雨が降っていなくても用意しておく傘のようだと思った。いつ降るかは分からない。でも、傘を持っていれば、突然雨が降っても「大丈夫」と思える。

いつか私も、あの帰り道で祖母がしてくれたように、大切な人のことを思い、その人の「大丈夫」を支えられる人になりたい。